句碑（くひ）　芭蕉（ばしょう）かきつばた碑（ひ）

（所在地）鷺洲二丁目一四―一

了徳院（浦江聖天）境内

「杜若」の句は俳人松尾芭蕉が「笈の小文」といわれる俳諧の旅で貞享五年（一六八八）四月二二日に、大坂の門人保川一笑宅を訪ねた折に詠（よ）んだといわれる。芭蕉翁の没後百二十年を偲（しの）んで、大坂在住の俳人社中が文化一一年（一八一四）に右の句碑を境内に建てた。左の解説碑は近年建てられたものであるが、芭蕉が浦江を訪れたことは確認（かくにん）されていない。

【碑文　右】

（正面）杜若（かきつばた）

語るも旅の
ひとつ哉（かな）
はせを

（裏面）

文化十一年甲戌九月　月夜庵社中建之

松井三津人（まついみつんど）

親かとも　おもふ夜もあり　山の月

【碑文　左】

芭蕉杜若（かきつばた）句碑

杜若　語るも
旅のひとつ哉
はせを

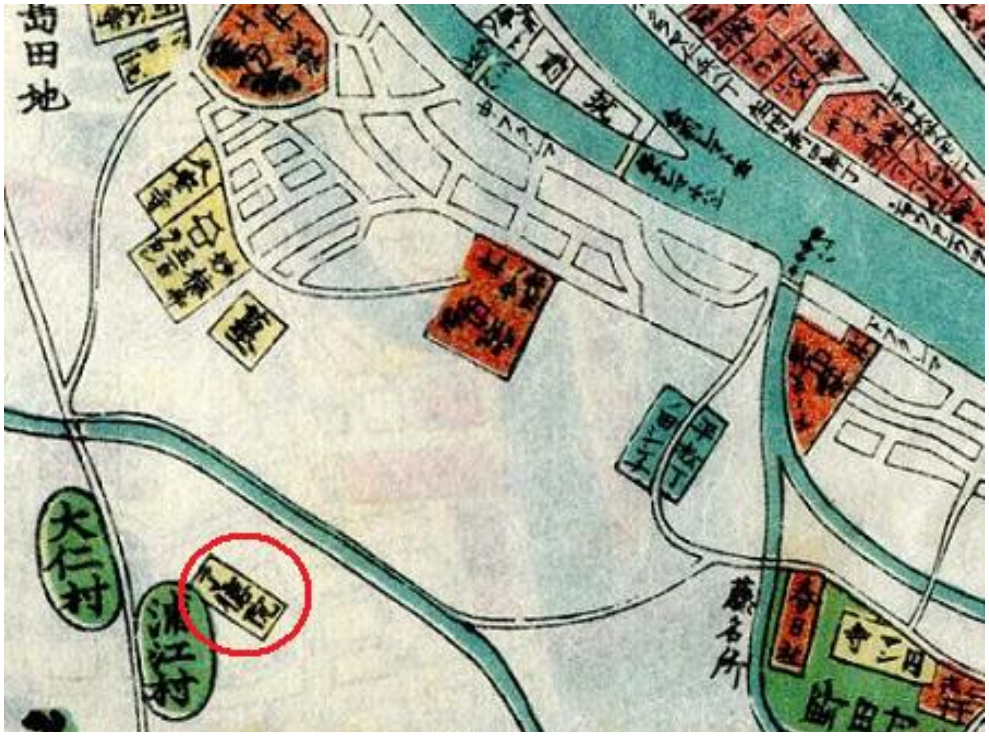
浦江の杜若は　江戸時代から有名で芭蕉もこの地を訪ねこの句を詠（よ）みました

この句は　文化十一年　俳人三津人が主宰する月夜庵社が建立したものです

親かとも
思う夜もあり山の月
三津人

芭蕉句碑

この句は『笈の小文』所収で、貞享五（一六八八）年四月、大坂八軒屋に滞在していた芭蕉が歌仙を巻き、二十四句で打止めにした折の発句である。この句碑は、『諸国翁墳記』（兵庫県伊丹市の柿衛文庫所蔵）の化政期（一八〇四～二九）の「杜若塚」に「摂北浦江邑了徳院境内　月夜庵三津人社中建之／かきつはた語るも旅のひとつかな　うらに　親かともおもふ夜もあり山の月　三津人」として記される芭蕉を祀る塚である。建立者であって芭蕉を師と仰ぐ蕉門俳人・月夜庵（三津人の号）の句集である文化一三（一八一六）年刊行『和麗東倭礼』（奈良県天理市の天理大学附属天理図書館所蔵）がある。その書の秋の部「山の月」には、この塚を建立した時の事情を「親かともおもふ…」句の前書に、浦江邑の了徳院境内の池に杜若がたくさん植えられていて、その国に名高いので、「翁の句碑を爰に営む」とあり、開眼の日は秋であったとも記している。開眼の日は句碑建碑の「九月」と一致する。建碑の年は芭蕉の百二十回忌の翌年に当たる年で、この芭蕉句碑は蕉風を弘める拠点として、浦江村の了徳院に月夜庵三津人社中が建立した塚である。



『大阪細見図』
弘化二年（一八四五）より